

アーフォントステル号発見の有田産アルバレロ形壺

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野上, 建紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9776

アーフォントステル号発見の 有田産アルバレロ形壺

野上 建紀

はじめに

1659年にオランダ東インド会社は有田などの肥前の窯業地に磁器の大量注文を行った。長崎商館長ザハリアス・ワヘナール発行の同年の送り状にはオランダ本国向けを含んだ33,910個の陶磁器が記録されている(山脇, 1988:285)。そして、この大量輸出時代の幕開けの年、アーフォントステル号¹⁾ the *Avondster* がスリランカのゴールで沈没している。沈没したアーフォントステル号からは数点の有田焼が発見されており、その中には薬用壺であった染付アルバレロ形壺が含まれていた。

エキゾチックな響きのある名前をもつアルバレロ *albarello* の原型は遠く12世紀のイスラーム陶器のエル・バラニ *el barani* に由来するという(角川書店, 2002)。イスラーム教徒のムーア人によってイベリア半島に伝えられ、イスパノ・モレスク陶器が誕生し、ラスター彩やコバルト彩のアルバレロが製作された。そして、これらがイタリアに輸出されるようになるとマヨリカ



Figure 1 アーフォントステル号発見の
有田産アルバレロ形壺
(Hans Bonke et al.(eds.) 2007 より転載)

陶器で製作されるようになり、それはやがてオランダに伝わりデルフト陶器などで製作された。さらに17世紀になってからオランダ東インド会社の注文を受けて有田でも作られた。

有田のアルバレロ形壺は、これまで生産地である有田の他、長崎の出島和蘭商館、そして、オランダ東インド会社の拠点があったモーリシャス (Kim Spijker, 2001)、さらにはオランダ本国のアムステルダムなどで発見されている(バート, 2000:211)。医療用の薬用壺として各地で使用されたのであろう。

アーフォントステル号の航海

まず2007年に刊行された発掘報告書(Parthesius (ed.),

2007) の記述からアーフォントステル号の航跡をたどることとする。この船は元タイギリス船であった。建造年は不詳であり、最初の記録にはジョン&トーマス号 *the John & Thomas* という名前で現れる。そして、1641年のイギリス東インド会社による購入後、ブレッシング号 *the Blessing* と名付けられた。

1652年に英蘭戦争が勃発し、オランダ東インド会社は5隻のイギリス船を拿捕した。その内の1隻がブレッシング号であった。拿捕後、ジャワに送られ、アーフォントステル号と名付けられた。

そして、1654年にアーフォントステル号はオランダ本国に送られた後、1655年にはバタヴィアに戻り、その翌年には日本の将軍に献上する贈り物を運ぶ際に日本へ航海している。長崎からバタヴィアに戻った後、1657年にオランダ本国に向けて出帆したものの、深刻な漏水のために引き返すこととなった。ヨーロッパ向けの積荷は別の船に積み替えられ、もはやヨーロッパへの長い航海には耐えられないと判断されて、地方航海用に転用されたようである。アーフォントステル号はすぐにバタヴィア湾の *Craowan* の任務の警護とバンテン封鎖を命じられることとなる。

その後、アーフォントステル号はポルトガル人との戦闘のために南インドに派遣された。アーフォントステル号はコロンボやネゴンボからコロマンデル海岸のトゥーティコーリン(トゥットウックデイ)へ兵士を運んだ。次にマンナール島の戦闘にも参加し、ポルトガル人捕虜をベンガルへと運んだ。それから、布、米、油、バター、アヘン、火薬を積んでセイロンに戻っている。1659年の初め、アーフォントステル号はマラバル海岸のバラソールに積荷を取りに派遣されたが、積荷の米が集まるのが遅かったため、1659年の4月の最後の週になってようやくコロンボへの帰途につくこととなった。そして、1659年7月2日、ゴールのブラック・フォート近くに投錨したものの、錨がはずれ、投錨地点の北東にある岩礁に衝突して沈んでいる。

アーフォントステル号の1656年の日本来航について、少し説明を加えておく。当時の長崎商館長はザハリアス・ワヘナールである。前述したように有田などの窯元に大量注文を行った時の商館長であった。オランダ東インド会社は将軍にヨアン・ブラウ製作の地球儀・天球儀を贈る際にワヘナール宛の手紙を添えている。それには「絹織物や珍しい品物の他に、美しい地

球儀・天球儀をここに贈る。二つの球儀は少し前に、共和国において日本向きに眺めたもので、価格は1000グルデンであった。幾何学の器具も送付する。日本人はおそらく器具を扱うことができないと思うので、幾何学に通じた下級商務員ヤン・ピーテルスゾーン・フェルスヒューレンが、ヤハト船「アーヴォンド・ステレ(宵の明星)」号でそちらに向かう。貴下(ワヘナール)は他の男の代わりに彼を江戸参府に同行させることができる。もし必要とあらば、彼は宮廷で地球儀・天球儀の用法と器具の取扱い方を指導することができ、我々の考えでは、これは感謝されるであろうし、贈り物の効果を高めることになる。」とある(オランダ村博物館, 1987:15)。これら一対の地球儀・天球儀は翌1657年1〜3月のワヘナールの江戸参府の際に江戸へ運ばれている。

輸出記録から見る有田焼の薬用壺

肥前の医療用の薬用壺は記録上、1650年代より輸出されている。ここでは有田など肥前で生産された医療用磁器についてその輸出記録を見ていく。有田の医療用磁器の輸出記録に関しては、山脇悌二郎や櫻庭美咲の研究成果がある。山脇は1652年から1657年までの5ヶ年の海外輸出について、「長崎商館長発行の送り状によれば膏薬壺 *zalf potiens*、薬用瓶 *medicamenten fleskens* のような薬剤容器であって、全てタイワン商館とバタヴィアの政庁所属の病院 *chirurgijnswinkel op Batavia* に送っている。」と記し、さらに「タイワン商館に送ったのはタイワンのゼーランジア城、サッカムのプロビンシア城の病院で使用されたのであろう。この間の輸出は18,111個である。」と記している(山脇, 1988:284)。そして、それらはバタヴィアから送り届けられた手本に従って製造されているという(山脇, 1988:284)。

山脇の研究により1659年の大量注文以前の肥前磁器の輸出品の多くは医療用磁器であったことがわかるが、その著書にはその具体的な内容については記されていない²⁾。その具体的な内容は櫻庭美咲の近年のいくつかの論考によって知ることができる(櫻庭, 2002, 2006)。櫻庭はその中でアーフォントステル号の送り状の試訳も行っている。すなわち、1656年11月2日長崎発バタヴィア行きアーフォントステル号の送り状の内容として「2136個 外科治療所向け磁器の

壺 合計…99.6.2 テール f.283.18.5」と記している(櫻庭, 2002:99-100、櫻庭, 2006:41)。「外科治療所向け磁器の壺」とはまさに今回、紹介するアルバレロ形壺のようなものであろう。

アーフォントステル号の資料の性格

資料の紹介を行う前に出土遺物の性格上の問題に触れておく。発掘報告書(Hans et al (eds.), 2007)に掲載されている陶磁器を見る限り、主に三つの時期の遺物が発見されている。一つは沈没年代に非常に近い生産年代の遺物である。これらはアーフォントステル号に伴う遺物と考えて問題ないであろう。もう一つは沈没年代よりやや古い17世紀前半頃の遺物である。アーフォントステル号の沈没時の性格を考えると、積載されていた陶磁器の多くは商品ではなく、船上の使用品であった可能性が高い。その場合は入手に至るまでの流通期間とその後の消費期間が存在する。そうした期間を考慮すれば17世紀前半代頃のものも概ねアーフォントステル号に伴うと考えても差し支えないと思う。一方、これらの他に18世紀以降の製品と推定される青花碗や仙芝祝寿文(靈芝文)青花碗、徳化窯系の青花碗、いわゆるウィローパターンの青花皿なども見られる。これらは明らかにアーフォントステル号沈没以後に生産されたものであり、アーフォントステル号に伴う遺物ではない。ゴール湾では13世紀から現代に至るまで複数の沈没船を含め、数多くの遺物が海底で発見されている。アーフォントステル号の調査で発見されている18世紀以降の遺物もまた沈没船に伴うものであれば非常に近接した範囲に2隻以上の沈没船が存在したことになる。あるいは陸地に比較的近い位置にあるため、陸地からの遺物の流れ込みも考えられる。そのため、アーフォントステル号の資料は厳密な意味では一括性を有するとは言い難い。しかしながら、大半がアーフォントステル号の沈没年以前の製品であること、また、混入している遺物の年代が沈没年と大きく離れた18世紀以降のものであることから、出土遺物の中からアーフォントステル号に伴うものを抽出することは困難ではない。よって沈没時の陶磁器組成を知ることは可能であると考えられる。

アーフォントステル号発見の有田焼

沈没したアーフォントステル号から肥前の染付皿が

発見されていることはすでに紹介したことがある(野上・Ketel, 2006)。すなわち、有田で1650年代に生産されたと推定される染付宝文芙蓉手皿が発見されている。航海記録から晩年のアーフォントステル号は戦闘時の輸送船あるいはインド海岸やスリランカ付近の近距離輸送船として使用されていたことがわかる。アジアの産物をヨーロッパなどに向けて長距離輸送する船ではなかった。そのため、沈没時の積荷の中に芙蓉手皿が含まれていたとしてもそれはヨーロッパなどに向けられた商品ではなく、船上で使用されていたものと考えの方が妥当である(野上・Ketel, 2006)。

そして、今回、新たに発見された薬用壺の染付アルバレロ形壺について、発掘報告書では8点紹介しているが、いずれも同種の製品である。同一個体の破片も含まれていると思う。形状はいわゆるアルバレロの形であり、平底で胴部が直立した筒状の壺である。口部付近はくびれている。布や紙、皮などによって蓋を被せて紐で縛って封をしやすいようにしている。文様は胴部に鋸歯状の幾何学文様、口部付近のくびれ部と底部脇には半菊唐草文や花唐草文が入っている。幾何学文はオランダ陶器のアルバレロの文様である。有田のアルバレロ形壺はバタヴィアから送り届けられた手本に従って製造されており(山脇, 1998:284)、形状とともに文様も手本を模したのであろう。実際にオランダ陶器のアルバレロは出島和蘭商館でも出土している。有田では猿川窯、下白川窯、谷窯、幸平遺跡など有田東部(後の内山)地区の窯跡や遺跡でアルバレロ形壺が出土している。今のところ、有田西部(後の外山など)や有田以外の肥前地域の窯跡では出土していない。有田で出土しているアルバレロ形壺は染付製品と白磁製品がある。底部しか残っていない谷窯の製品を除いて、染付製品はいずれも胴部に幾何学文が入り、口部のくびれ部と底部脇には点描文が入る。アーフォントステル号で発見されたアルバレロ形壺のように唐草文が巡るような製品はまだ窯跡から発見されていないが、半菊唐草文や花唐草文そのものは1640～1650年代頃には一般的に見られる文様であり、オランダ陶器のアルバレロの文様と有田の文様を組み合わせたものであろう。半菊唐草文や花唐草文の描き方を見ると、有田で焼かれたアルバレロの中では古いタイプの製品と言えよう。生産年代はやはり1650年代頃と推定され、アーフォントステル号の沈没年代と合致する。

ただし、アーフォントステル号で発見されたアルバレロが前掲の送り状にある 2136 個の「外科治療所向け磁器の壺」の一部であるかどうかまではわからない。2136 個の壺を購入した際に別に船の常備薬のために購入した可能性もあるし、当時、出島で使用していたものを入手した可能性もある。あるいはバタヴィアの病院で薬とともに入手した可能性も考えられる。輸出された陶磁器は記録に残っているものだけではなく、いろいろな入手方法や経路があったであろうが、いずれにせよ船の航海記録や長崎からの輸出記録を見る限り、1655～1657 年頃に長崎か、バタヴィアで手に入れたものである可能性が高いと思う。

そして、量的に少ないことや船の性格を考えると、前述の染付芙蓉手皿と同様に商品として運ばれたものとは思えない。アジア各地に点在していた商館で使用するために運んでいた可能性もあるが、船もまた当時のオランダ人が暮らした空間の一つであり、船上で使用していたものとする方が妥当だと思う。常備薬などが詰められていたのではないかとと思われる。そして、アーフォントステル号で共伴して出土するオランダ産のアルバレロと性格的には変わらないものと思われる。船から有田焼のアルバレロが発見された例は他にもあり、1697 年にケープタウン沖で沈んだオースターランド号では有田焼の白磁のアルバレロが薬の残滓とともに出土している。当時の船では常備されているのが一般的であったのかもしれない。

おわりに

有田の薬用壺が 1650 年代から輸出されていることが記録には残っていたが、これまで 1650 年代に輸出されていたことを示す考古学的な確実な証拠はなかった。今回、アーフォントステル号で発見されたアルバレロ形壺はその初めての例となる。今後、同時代に輸出されているアルバレロ形壺以外の医療用容器も発見される可能性がある。また、アーフォントステル号ではオランダ産のアルバレロの他、ドイツのライン炆器の瓶なども共に発見されている。これらヨーロッパ産陶器との関係を知ることも今後の課題であろう。

註

1) 野上・Ketel, 2006 ではオランダ村博物館 1987 よりアーヴォンド・ステル号と訳したが、本稿では櫻庭 2002, 2006 に従い、アーフォントステル号と訳することにした。

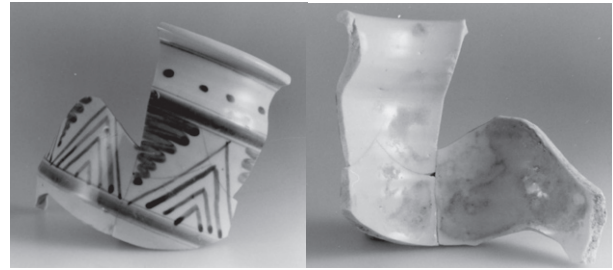


Figure 2 猿川窯跡出土アルバレロ形壺
(大橋 1988 より転載)

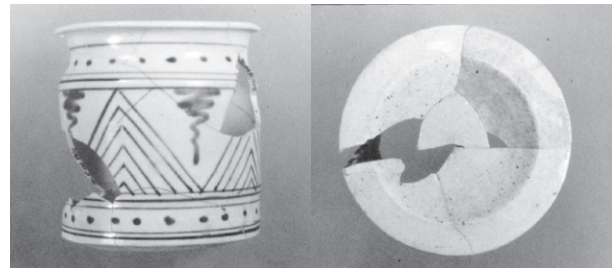


Figure 3 下白川窯跡出土アルバレロ形壺
(佐賀県立九州陶磁文化館 1988 より転載)

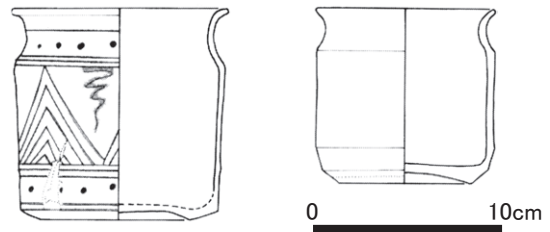
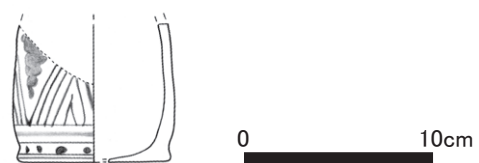


Figure 4 谷窯跡出土アルバレロ形壺
(有田町教育委員会 1991 より転載)



Figure 5 幸平遺跡出土アルバレロ形壺
(有田町教育委員会 2002 より転載)



2)「あとがき」には紙数の制約により原稿の一部を削除したとある。削除された部分の内容については知る由もないが、刊行された部分だけでも示唆に富む貴重な内容をもっており、全てが公表されなかったことは非常に残念である。

引用文献・参考文献

有田町教育委員会 1991『佐賀県有田町 谷窯跡の発掘調査』
有田町教育委員会 2002『幸平遺跡』
大橋康二 1988『有田町史古窯編』有田町
大橋康二 2000「輸出した伊万里の医療品 1」『目の眼』No. 283
オランダ村博物館 1987『オランダ東インド会社出島商館長ワー
ヘナール』
角川書店 2002『角川日本陶磁大辞典』
佐賀県立九州陶磁文化館 1988『下白川窯・年木谷 1 号窯』
櫻庭美咲 2002「オランダ東インド会社文書における肥前磁器
貿易史料の基礎的研究-1650 年代の史料にみる医療製品取引と

ヨーロッパ陶磁器の影響-」『武蔵野美術大学研究紀要』No. 33
p91-103

櫻庭美咲 2006「オランダ東インド会社日本商館文書における肥
前磁器貿易史料-1650-70 年代の医療製品取引に関する史料研
究の再考-」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 16 号 p36-39

野上建紀・Christine van der Pijl-Ketel 2006「アーヴォント・ステ
レ号発見の肥前磁器」『水中考古学研究』第 2 号 p74-77

山脇梯二郎 1988「貿易篇-唐・蘭船の伊万里焼輸出-」『有田町史
商業編 I』有田町

ヤン M バート (河島綾乃訳) 2000「アムステルダムの日本磁器
出土遺物」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館

Robert Parthesius (ed.) 2007. *Excavation of the VOC ship Avondster.*

Hans Bonke, Robert Parthesius, Christine van der Pijl-Ketel (eds.) 2007.

Artefact Catalogue of the VOC ship Avondster.

(e-mail: takenori_n@hotmail.com)